

時間と生をめぐって
——ハイデガーとフッサール——

名古屋大学 宮原勇

「思索していると、あたかもヘラクレイトスがそばに立っているようなときが何度もある」
(ハイデガー)[Walter Schulz に語った言葉]¹

0. はじめに ——ハイデガーは何を問いつづけたのか——

晩年になっても「現象学」という立場を結局は捨てずに、しかも存在の問いを問い続けたハイデガーは、そもそもその存在という概念でもってなにを探求しようとしたのだろうか。存在と時間との間の根源的関係を解明しようとしたとするならば、どのような洞察にたどり着いたのだろうか。

われわれは、ハイデガーが生涯をかけて目指した道、つまりあくまでも「時間」という視点から「存在」を問う姿勢を追究してみたい。それは、まさに時間的な出来事として〈存在者が存在するようになる、現れる、出現する〉といった事態の解明である。本発表では、そのような時間的プロセスを「現出」(Erscheinung)と呼ぶことにする。

1. フッサール初期時間論のアポリア

まずわれわれは、Husserliana, Bd.X の時間論がいかなる認識論的枠組みの中で論じられているかを明示しておかねばならない。そして、その内的時間意識の分析を通じて、そのような認識論的枠組み、言い換えれば認識論的スキームが崩壊し始めるのである。下記の基本概念は、『論理学研究』初版の1900/01以降、そして『純粹現象学および現象学的哲学の諸構想(イデー)]第一巻1913年に至るまでの時期の認識論上のスキームである。下記の基本概念は、擬似的に公理系の形式で呈示することにする。場合によっては自明な項目もあるが、そのような項目を掲げるのも、いかなる前提が潜んでいるかを明らかにするためである。

- I. 人間の認識活動を志向性、ないしは志向作用という。
- II. 志向作用には、それぞれ対象が対応するとともに、そのような志向作用によって意識内に生じた表象、あるいは意識内容が対応している。つまり、作用—内容—対象という三項関係が想定されている。
- III. 志向性には、「現在化」(Gegenwärtigung)と「現前化」(Vergegenwärtigung)の区別がある。現在化という志向作用のグループには、知覚が含

¹ Werner Beierwaltes, *Heideggers Rückgang zu den Griechen*, Verlag der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, München, 1995, S.5.

まれ、現前化のグループには、記憶(長期記憶としての想起)や想像が含まれる。

IV. 記憶には第一次記憶(短期記憶)と第二次記憶(長期記憶)がある。前者は「過去把持」(Retention)²といい、後者は「想起」(Wiedererinnerung)という。

V. 外界の様々な事象やわれわれの意識の内部に生起する心の活動や感情などをみな「現象」(Phänomenon)という。それに対して、「現出」(Erscheinung)といった場合、<～が現出する>といった動詞表現を念頭に置いて使用され、その場合の対象は「現出するもの」(das Erscheinende)と表現され、「現出」(Erscheinung)自体は、そのようにして現出している「現象」そのものを指す。

VI. 時間的に変化する対象に関して、連続体(Kontinuum)とは、始まりと終わりをもつひとまとまりの対象をいい、それを形成する部分を位相(Phase)という。さらにそれぞれの連続体は、時間位置(Zeitstelle)、言い換えれば時点から成っている。時点は、幾何学的点とは異なり一定の可変的幅がある。連続体とその位相との関係は相対的であり、全体と部分の関係に当たる。

VII. 時間には三つの時制がある。即ち、過去、現在、未来である。

VIII. 過去に関して、過去把持と想起の区別があるように、未来に関しては、未来把持(Protention)と予期(Erwartung)の区別がある。

IX. 認識とは、意識の内部に対象に関する認識内容を「構成」(Konstitution)する働きである。そのようなプロセス自体を<対象を構成する>作用とも表現する。そのような構成のプロセスは、感覚が与えられる段階と、そのような感覚に<意味を付与する>(Sinnggebung)働きとから成っている。後者の段階の作用を「統握」(Auffassung)と呼ぶ。

以上の基本概念(conception)を前提にし、フッサールの『時間講義』下記のいくつかの問題を統合的に説明できるか検討することとする。ここで「前提」という表現を使用したのが、あくまでも暫定的前提であり、問題の解明が困難になった場合には、上記の基本図式の変更が必要になる可能性がある。

さて、フッサール自身も認めているように³、過去把持は、志向性であるがかなり奇妙な構造を持っている。過去把持は、知覚と同様に現在野(Präsenzfeld)

² ただし、「過去把持」という概念自体、この時間論講義において出現したのであり、この時間論講義が前提していたとはいえない。

³ Hu X, S.31ff., § 12.

の中に位置づけられるが、それ自体、措定的作用なのであるのか、措定的性格を有するのか問題である。未来把持に関しても同様の事情がある。

Husserliana Bd.Xの編纂者 Rudolf Boehmが、1908年から1909年にかけて書かれたとする草稿(Nr. 50 草稿、Hu X S.324-334、これは Beilage V、同 S.109ff.に關係する)においてフッサールは自らの根本的立場を変更したというテーゼを検討する。それまで知覚(作用)の時間と知覚されたものとの時間が同一である、あるいは感覚(作用)の時間と感覚されたものの時間とは同一であるという<志向作用と志向対象/志向内容との同時性>というテーゼが否定されたとされる見解に関して検討する。このような見解は、Leuvenの Husserl-Archiefにかかわる三人の研究者⁴による著作 *Edmund Husserl, Darstellung seines Denkens*, Felix Meiner, Hamburg, 1989, S.102 によって明確な形で定式化されている。

まず、彼らの定式化を見てみよう。

フッサールは、それまで<感覚作用が働く時間と感覚された対象の時間とは一致している、つまり同時である>、<知覚作用の時間と知覚対象の時間とは同時である>と考えていた。それが、1908年10月から1909年の夏学期までの間に執筆された Nr.50において、立場の変更をしたという。そのテキストでは、過去把持に伴う対象の側での変様と「時間を構成する流れ」をいかにして知覚するかを論じた後、次の文でもって締めくくる。

時間流が客観的運動のようにみなされることに、不合理な点はあるのだろうか。---ある。他方、記憶[この場合、第一次記憶、つまり過去把持]もそれ自身、自らの今を有する何ものかである。そして、例えば[ある特定の]音と同じ今を有する。---違う。ここに根本的な誤りが潜んでいる。意識の諸様態の流れ(Fluß)は、ひとつのプロセスではない。その今-意識はそれ自体、今あるのではない。今-意識と<一緒に>存在する、過去把持の意識は、今あるのではない。それは、今と同時なのではない。同時と言ったところで、意味はない。従って、感覚は、それで意識が理解されたならば、(内在的に持続する赤や音などの、感覚されたことではない)、同様に、過去把持や想起や知覚などは、非時間的であり、内在的な時間の内にあるようなものではない⁵。

つまり、時間的对象とする意識作用から成る「時間を構成する意識」自体は、「非時間的」であるというのだ。なぜなのだろう。

もしかりに時間を構成する意識が時間の中にあるとすると、この意識を時間的なものとして構成するような、また別な意識が必要となるからである。この議論の根底には、つぎのような考えが潜んでいる。すなわち、<時間的なものとして与えられる全てのもの>(alles als zeitlich Gegebene)、つまり「現出するもの」(das Erscheinende)や、さらにはそれらを認識する体験さえも時間的なものであるから、意識の中で構成される(konstituiert)と考えているのである。

⁴ Rudolf Bernet:1946-, Iso Kern: 1937-, Eduard Marbach;1943-.

⁵ Husserliana, Bd.X, S.333f.

従って、〈究極的に構成する意識、つまり全ての構成に先立つ意識〉⁶は、意識ではあるが、「時間的」なものではない意識なのである。つまり、〈究極的に構成する時間意識〉の非時間性が帰結した、重要な時期という⁷。

また、Husserliana Bd. X 全体の英訳を刊行した John Barnett Brough が英訳に付けた詳しい解説によれば、1901年から1908年まで、フッサールは〈知覚は三重の内部構造を持つ〉と考えていたという。つまり、知覚とは単に現在という点的な瞬間になされる意識作用ではなく、対象の過去側面に対し志向的に「眼差しを向けている」し、現在側面に対しても同様に眼差しが向けられ、そして、未来側面に対しても眼差しが向けられている。ということは、知覚といえども、三重構造を有する志向性であるということになる。Broughは、われわれがすでにフッサールの認識論上の基本概念、ないしは図式と呼んだものの内でIXに当たる考えを「時間意識の構成の図式的解釈」と呼び、特記している。彼の表現だと次のようになる。

何らかの現出の様態における対象は、「もろもろの統握」、ないしは「作用-性質」によって、意識に内在する[感覚]内容を「活性化」することで打ち立てられる⁸。

ここでいう「内在的内容」とは、統握の働きと分離した形で考察すれば、特定の対象への指示に関して、ニュートラルである。例えば、ピンクの色の感覚内容自体は、それがデパートに置かれているマネキンの頬の色であると否かに関しては、なにも語らない。そのような対象への指示関係を限定するのは統握の働きであるというのである。そしてこの図式を時間意識に当てはめると、内在的感覚内容は、時間規定に関する限り、ニュートラルであるとみなされる。音の感覚内容自体、今でも、過去でも、未来でもなくなる。そのような時間規定は、時間を構成する統握によることになる。そうすると、知覚作用のどの位相においても、一連の内在的内容が見いだされることになる。そして、そのどの位相においても、そのような感覚内容を適切な仕方で活性化している〈時間-構成的〉統握が見いだされることになる。1905年の草稿による第16節ではつぎのように書かれている。

ある時間客観そのものを与えると主張するような作用[あるメロディーやあるいは一つの長さを有する音などを知覚する志向作用---持続の長さは相対化されている]は、自らのうちに、〈今の統握(pl.)〉や〈過去の統握(pl.)〉などを含んでいるはずであり、しかも根源的に構成する統握として含ん

⁶ *Ebd.*, S.73.

⁷ Vgl. Rudolf Bernet, Iso Kern, Eduard Marbach, *Edmund Husserl, Darstellung seines Denkens*, Felix Meiner, Hamburg, 1989, S.102 f.

⁸ John Barnett Brough, Translator's Introduction, in: *Edmund Husserl Collected Works, On the Phenomenology of the Consciousness of Internal Time (1893-1917)*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, 1991, p.XLIII.

でいるはずである⁹。

Broughの説明では、AとBという一連の音の場合、二番目の音Bが知覚される場合、その知覚位相は、時間構成作用である「今の統握」(H.X, S.230)によって活性化されている内容、ないしは「感覚」を含むことになる。そのような統握によって、Bに関する今-知覚が構成される。その時、ちょうど過ぎ去ったばかりの最初の音Aを対象とする第一次記憶は、時間構成作用である「過去の統握」(H.X, S.232)によって、内容Aが活性化されることを通じて構成されることになる。そして、最後には、これから起こることに関する第一次予期が、「未来の統握」によって、構成される。今-知覚、第一次記憶、第一次予期という、それぞれの知覚位相に属する三重の志向性がこのようにして構成されるという。そうすると、一定の時間的延長を有する時間的対象の知覚の場合、(1)感覚内容(pl.)から成る連続体と(2)時間構成的統握(pl.)から成る連続体、そして(3)時間的対象がどのような種類の対象であるかを規定する、対象そのものを構成する非時間的統握がある。

このような説明図式は、あるメロディーやあるいは一つの長さを有する音などを知覚する志向作用を説明するために考え出されたものであるが、そういった知覚作用自体、ひとつの時間客観であり、時間的延長を有することを1905年の草稿ですでにフッサールは書いていた。しかし、フッサールは1909年「絶対的意識」なる概念を導入してそれを説明しようとするまで、そのような性質を等閑視していたという。

実は、大変難しい問題が生ずる。ある時間客観の知覚自体が、時間客観であり、それが今-知覚として時間的特性を有する限り、あるいは少なくとも<現在>という意識を伴う限り、何らかの「時間構成作用」が必要となるのだろうか、という問題である。言いかえると、知覚自体を対象とする、謂わば「反省的」知覚作用は上述の図式に対応した構造を有しているのだろうか。あるいは、内在的な時間客観としての感覚内容自体も認識できるとして、そのような認識作用はどのようなものなのか。それは、現在時に生ずる時間客観に対する志向作用なのであるから、知覚でなければならない。とすると、やはり無限遡行に陥る。それを避けるために、そういった知覚作用などを対象とする、何らかの「気づき」の働きを考える。そのような気づきは、もうそれ以上背後へは遡行できないような「深い」レベルの次元であり、「絶対的」次元であるという。

1909年(Bernetの推定)に書かれた短い草稿である *Husserliana Bd.X* の Nr.48¹⁰ では、時間意識の図式<活性化する統握—意識内に存在する感覚内容>が維持

⁹ *Husserliana*, Bd. X, S.39.

¹⁰ Bernetは *Husserliana Bd.X* を構成している草稿を、その執筆時期と思想的变化を加味して、4つのグループに分けている。そのグループ4(1909-1911年に執筆された)の最初に位置する草稿がこのNr.48である。そして、このグループ4では、図式<活性化する統握—意識内に存在する感覚内容>が過去把持に対して適用できるかどうかを論じている。Vgl. Rudolf Bernet, *Einleitung*, in: *Edmund Husserl, Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins*, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 2013, S.XLVIIIff.

できないことを示唆している。

Husserliana Bd. Xにおける最終的な〈時間意識の理論〉とは、どのようなものであるのか。まず意識作用自体について何らかの仕方で気づく、謂わば反省的次元を「絶対的流れ」とし、意識作用を対象とはしない、通常の知覚作用は、そのような「絶対的流れ」が時間的に構成する〈内在的時間客観〉として位置づけられることになる。また、先に述べた三重の志向性は、その枠組み自体は保持されながらも、それは今述べた「絶対的流れのアクチュアルな位相」のどれも、今-知覚、第一次記憶、第一次予期といった三重の志向性を有するとされる。

そもそもそれ自体が内在的時間客観である、それぞれの意識作用を反省的作用によって把握するといっても、その際に〈統握—統握内容〉という図式はあてはまらない。というのも、「絶対的意識のレベルには、[対象の繋がるような]内容がない」からである。過去把持という意識作用は、これもまたひとつの内在的時間客観であるが、それは、絶対的流れのアクチュアルな位相において何らかの形で現前している[感覚]内容を記憶的統握によって活性化することで構成されるといったものではない。というのも、そもそもそのような「内容」がないのであるからである。そして、Husserliana Bd. Xの最後の番号が振られた草稿 Nr. 54では次のように述べられている。まずフッサールは、「先現象的、先内在的時間性は、時間構成的意識の形式として、志向的に自らを構成している」と述べた後で、時間構成的意識はそればかりではなく、〈絶対的流れの自己現出〉の可能性を語っている。

内在的時間を構成する意識の流れは、「その流れの中で、必然的に、流れの自己現出(eine Selbsterscheinung des Flusses)が存立しており、従って、その流れ自体必然的に流れることの中で(im Fließen)把握可能であるはずである。この流れの自己現出と言っても、第二番目の流れを必要とするわけではない。流れは、それ自身、現象(Phänomen)として構成される。構成するものと構成されるものとは、合致するが、当然のことながら、どんな観点からでも互いに合致するわけではない¹¹。

しかし、Stefan Gerlach が、論文 *Ist das Bewusstsein mit sich und seinen Gegenständen zugleich?*, *Zu Husserls Modifikation der Zeittheorie um 1909* にて、Bernet や Brough の主張に見られるようにフッサールは、何らかの立場の変更を行ったという見解を次のように批判した¹²。

(1909年以降見られる)〈絶対的〉時間流についてのフッサールの新しいテーゼは、[それまでの]意識の時間性に関するテーゼを撤回させるものでもなければ、意識と意識内部において現前する時間的客観との同時性というテーゼを撤回するものでもない。ただ表現を変えたにすぎない。Nr. 50のテキストの中には、その件に関する議論は見いだされず、別の種類のい

¹¹ *Husserliana* Bd. S.381f.

¹² *Zeitschrift für philosophische Forschung*, Band 67 (2013), 3, S.396ff.

くつかの問題が見いだされるのみである。【中略】それらの問題というのは、フッサールを、絶対的意識流の導入によって、主観的意識時間に関する彼のテーゼを変容させ、すべての時間関係の新たな基礎付けをするように向かわせた問題である¹³。

つまり、意識と時間客観との同時性が非同時性かという単純な選択ではなく、別次元への展開がなされたという。

まず同時性に関しては、過去把持における意識作用と対象に関して言えば、「単純で完全な同時性」のテーゼは考えられず、そのような主張をしてもこの『時間講義』全体の基本的考えを破壊してしまうものだという¹⁴。

また、知覚に関しては、Edith Stein が付けた *Beilage V* のタイトル「知覚と知覚されたものとの同時性」は「非同時性」とした方がよいという。そのような同時性のテーゼは、一般的な形ではフッサールにおいて主張されてはいないとする。

そして、「絶対的時間流」に関しては、フッサールは、1909年から1911年にかけて書かれたと Bernet によって推定された Nr.50 の草稿ではじめて、意識の非時間性が発見されたとするのも、誤解であるという。「絶対的流れは、時間の中にはないけれど、時間の流れとの関係は有している」という。フッサールのいう「絶対的流れ」は内在的体験流の「形式」(Form)であり、流れの比喩を使って言うならば、<具体的な感覚与件から成る実際の感覚流の流れが、その上を流れ去って行く「河床」(Flussbett)>¹⁵であるという。とは言え、「河床」はその上を流れる水がなくなったら、その存在意味がなくなるのと同様に、「絶対的流れ」は形式として、内容とは独立に存立し得ない。そして、その具体的流れの独自のあり方は、<過去把持-原印象-未来把持>という三相性の内部構造を持つ「水平方向の志向性」(die Längsintentionalität)¹⁶で十分表現されているのであり、そのような構造契機が持続や変化、連続性といった主観的現象を可能にする条件となっている。そして、その形式的構造自体としての「絶対的流れ」は、フッサールの表現で言えば、「自己現出」という事態で十分だとする。そして、最終的に Gerlach は次のように結論づける。

フッサールが、一方では、[感覚的]クオリアを有することとそれを意識することとの同時性でもって言い表そうとしたことと、時間的に流れ去るものと対比して絶対的意識流の非時間性ということと言い表そうとしたこととは、同じ事柄の異なった側面に過ぎない。フッサールが、絶対的意識流という概念を用語として導入したことで、時間講義の中ですでに[絶対的

¹³ *Ebd.*, S.398.

¹⁴ *Ebd.*, S.404.

¹⁵ *Ebd.*, S.423.

¹⁶ Längsintentionalität に関しては、Brough の英訳 a horizontal intentionality に従って「水平方向の志向性」と訳す。Cf. Translator's note, in: *Edmund Husserl Collected Works, On the Phenomenology of the Consciousness of Internal Time (1893-1917)*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, 1991, p.85.

時間流という用語を導入するまでの時期の講義、ないしは草稿で]本質的に形作られた形態で呈示された、時間意識に関する自分の根本的見解を見直したのは、名称上のことであって、事柄に関して見直したわけでもなく、ましてや唯一の重要な観点で再検討したわけではない¹⁷。

結局われわれは以上の議論の双方の見解から下記の事項を学び取ることができるだろう。

まず、同時性と非同時性は、知覚作用自体の内部構造が三重化し、三相化しているのであるから、感覚、ないしは原印象に着目するか、それとも統握による活性化に着目するかで、知覚の成立する時点が違う。感覚という現象自体を捉えるならば、感覚を有するということと感覚を意識するということとは、分離できないはずであるから両者は必然的に同時である。

<統握—感覚内容>という図式自体は、時間意識の分析に際してその有効性が失われたということはない。そもそも、この時期以降の『イデーニ I』(1913年刊行)では、*sinngebender Akt* と *sensuelle hylé* との二相性として、カント主義的図式の中でよりいっそう鮮明に維持されていくのである¹⁸。

<時間を構成する絶対的意識流>の存在自体、最終的には「自己現出化」によって、意識に対して立ち現れるということを指摘してきたことは、そのような根源的なレベルを探り当てたという大いなる意義はあるが、理屈としては<現出の現出>の無限反復を回避する方策という意味がある。絶対的意識流とは、それ自身 *unzeitlich* であるというテーゼは、哲学の中での時間論で絶えず語られてきた *the precious present* が *nunc stans* としてそれ自身、時間的流れから免れているという事態である。アウグスティヌスの<三重の現在>も同様であり、McTaggart のいう A 系列自体、根源的現在時制が *the precious present* において、自己現前化しなければ成立し得ない¹⁹。そして、それは流れる具体的な感覚的内容とともに、一緒に流れてしまえば、流れとともに基準も失われてしまうこととなり、流れの感覚が生じ得ない。目盛り自体が、過ぎ去ってしまうのであれば、その過ぎ去り自体どのように知るのだろうか。時間的現出を可能にする時間構成的流れが、流れ去るといった場合、何に対して流れ去るのがわからなくなる。しかしながら、それ自身不活性な仕方であってまったく動きがなければ、移り去る者の痕跡も残らないであろう。Gerlach が奇しくも「河床」といったように、止まりつつあるものなのだろうが、もちろん流れ去る河の水がなければ意味がない。不動の実体的なものではない。

さて、そこでハイデガーに戻り、ハイデガーが「知覚」の動的な構造を見事に解き明かしてくれているテキストを分析することとしよう。われわれはそれを、感覚と意味付与的統覚の関係の問題として展開したい。ある意味では、それは、フッサールでいえば *protention* の機能に帰せられるような予期的契機を

¹⁷ Stefan Gerlach (2013), S.424.

¹⁸ この点に関しては、本発表の範囲ではない。次の研究書を参照のこと。G.A. de Almeida, *Sinn und inhalt in der genetischen Phänomenologie E. Husserls*, *Phaenomenologica* 47, 1974.

¹⁹ Cf. J. Ellis McTaggart, *The Unreality of Time*, *Mind*, Vol.17, No.68, pp.457-474.

絡めて分析しているのである。われわれにとって存在するものが自らを呈示してくれるようになるメカニズムが描かれていると考えられるからである。

2. 虚偽の「思いなし」をめぐるハイデガーの議論

ハイデガーが 1930 年代に行った「プラトン『テアイテトス』の虚偽論」(1931-1932)を検討する。そこで問題となるのは、虚偽の「思いなし」(Meinung、δόξα)の可能性であるが、特にわれわれは、(1)leibhaftig に gegenwärtig-haben することと(2)先行的な表象へと関わること、つまり Vergegenwärtigung という二重性を有する Gabel モデルに注目することにする。

まず『テアイテトス』のテーマ、エピステーメー(ἐπιστήμη)とはなにかという問いからはじめられる。まずは、知識の本質は知覚(感覺 αἴσθησις)なのかを問う。

ハイデガーによれば、ギリシア語の ἐπιστήμη とは、<あるものに歩み近づく、ある事柄に携わってそれに熟達している、通暁している>(ich trete einer Sache näher, befasse mich damit, und zwar um ihr gerecht und gewachsen zu sein)²⁰ことをいう。つまり、『存在と時間』の用語では verstehen に当たる。sich auf~verstehen という形で使用され、「あることに精通している、熟達している」という意味なのである。それに対して、αἴσθησις とは、具体的には「見ること」であり、それは<現前するもの(das Anwesende)それ自身を把握すること>であり、<存在者をその現在(Gegenwart)において把握すること>である。それは「現在の持つこと」(ein Gegenwärtig-haben)であるという。あるいは、「見ること」とは、<あるものを、その現前性と恒常性に関して意のままにすること>(etwas in seiner Anwesenheit und Beständigkeit zur Verfügung haben)であるという。つまり、ἐπιστήμη とは、すでに事柄を事前に熟知しているという状態をいい、αἴσθησις とはまさにその現前性において所有することを指す。このような二つの知のありようを区別する。

例えば風貌が似ているソクラテスかテアイテトスカまよい、テアイテトスをソクラテスだと看做す「虚偽の思いなし」(ψευδῆς δόξα)がなされる場合、眼前に姿を現している人間を感覚的知覚によってまざまざとありのままに(フッサールの用語では、leibhaftig)把握していることと、以前すでに見知っていて記憶の中にとどめておいた人間の像が必要になってくる。つまり、知覚においてすでにこの二層構造がなければ、虚偽の知覚の可能性を明らかにすることはできない。知覚といえども、単に現在において現出している要素のみならず、何らかの「過剰」な要素の参与がなければ ψευδῆς δόξα の成立はあり得ない。

そこで、ハイデガーは、実際には講義室からは見ることができない山の山頂に立つ Feldbergturm を例に出し、二種類のかかわり方があることを説く。すなわち、まず実際に leibhaftig にその塔を見る場合、つまり、視覚的知覚によって<われわれが直接的に現前する存在者をわれわれの現在において所有すること>(wir haben das unmittelbar anwesende Seiende in unserer Gegenwart)、つまり Gegenwärtig-haben、ないしは端的に Gegenwärtigen(現在化)というわれわれの<

²⁰ Martin Heidegger, *Gesamtausgabe* Bd. 34, S.153.

かかわり>(Verhalten)²¹がまずひとつ。さらに、それとは違ったかかわり、すなわち、講義室で Feldbergturm を思い出したり、想像したりする場合である。つまり、その存在者が直接にはわれわれの「現在」には現前していない場合に、その存在者を思い出すとか、想像するといったことを行う、いわばくその存在者を現代的にするかかわり>、端的に言って *Vergegenwärtigen*(フッサールの用語の訳語に合わせる形で訳すと「現前化」である)というかかわり方をする。これは当然のことながらわれわれが掲げたフッサールの認識論の基本概念 III の定義に一致するが、しかしハイデガーは、これまたわれわれが確認しておいた基本概念 II、つまりわれわれの認識作用といえどもつねにそれは何らかの対象へのかかわりであり、なんらかの存在者へのかかわりであることを根拠に、想像したり、思い出したりするという「現前化」でも、単に「意識の作用」ではなく、あくまでもくある存在者に対するわれわれのかかわり>として記述しようとする。

以上の「現在化」と「現前化」という二つのかかわりを区別することで、やっとく虚偽の思いなし>の可能性が説明できるのである。

ハイデガーは、く虚偽でありうる思いなし>を具体例を出して説明している。

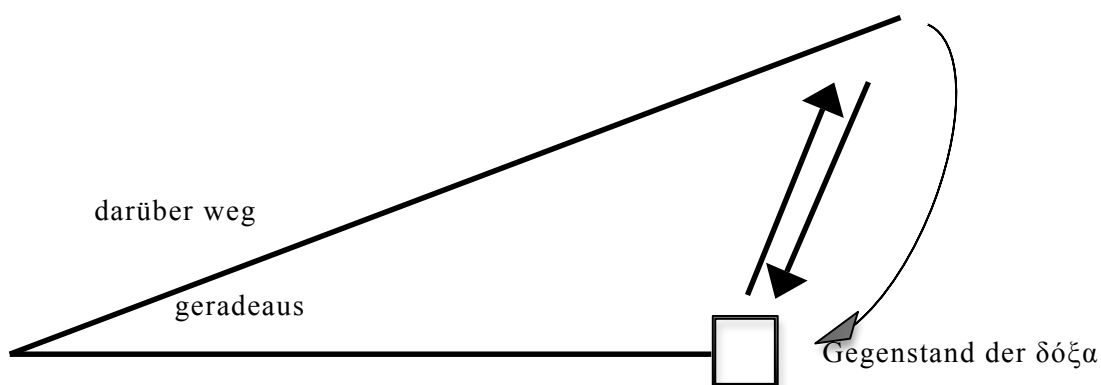
ある人に遠くから出会う場合。そのように見かけられたそのものは、ある見かけを有しており、そのように見える。しかも、それはテアイテトスのように見える。したがって、このテアイテトスのように見かけられたものをわれわれはテアイテトスと看做す。それは、それをちょっと眺め、それが呈する外見から判断して、そう看做すのである。それとは別の可能性もある。われわれはテアイテトスを知っている。われわれは彼がこの時間にこの道をいつも来るのを予め知っている。つまり、われわれは予めテアイテトスのことをくこの、現にそこにあるように存在している人>として現前化する(*vergegenwärtigen*、想像する、ないしは思い起こす)のである。そして、さしあたっては *leibhaft* に与えられていないこの存在者とその様子に対して、くかかわる>のである。【略:テアイテトスがいま近づいてきている当人であるかどうか、十分にはわからないけれども、しかし、そうであるには違いないとわれわれには見えるのである。】われわれは、近づきつつある人をテアイテトスと看做すのだが、今のところ、眺めて(つまり、現在化によって)そう看做すのではなく、先行的に現前化すること(*die vorlaufende Vergegenwärtigung*)によってそう看做すのである²²。

つまり、「思いなし」(*δόξα*)の場合、*Vergegenwärtigung* は「先行的」、あるいは「予め」という働き方をする。すでに過去において知っていることを現在において先駆的に、実際の *Gegenwärtigung* を追い越す形で、そのものにかかわる。過去からの想起(*μνημονεύειν*)なのだが、先駆的予測という面を有している。そして、最後にそのような先行的想起と知覚(*αἴσθησις*)とを比較考量する *διάνοια*

²¹ *Ebd.*, S.296.

²² *Ebd.*, S.311f.

がかかわるという。そして、結局 δόξα とは、<直接的現在化において出会うものを、予め現前化した事柄と一緒に結びつけること>(ein Zusammengreifen des in der unmittelbaren Gegenwärtigung begegnenden mit dem im voraus Vergegenwärtigungen)²³なのである。δόξα という事態は、現在化と現前化という二つの志向性を διάνοια によって結びつけることに特徴があり、しかも現前化とは、現在化を追い越し、それに先行するという特徴を持つ。それを図示すれば下記のように Gabel(「二股状の刺叉」)の様な形になり、ドクサの対象を挟み撃ちにしている²⁴。



この Gabel の長い歯(Zinke)は、Vergegenwärtigung を表し、水平のものは Gegenwärtig-haben を表している。そして、両方の志向性を比較考量しているのが διάνοια である。

ここで、ハイデガー自身、このような構造が心理作用を表現しているものではないと述べていることを承知の上で、敢えてフッサールの認識論、ないしは時間意識の分析と対比してみよう。

「虚偽の思いなし」というのは、認識上の錯誤のことであるが、ハイデガーがプラトンの分析を通して示しているのは、現在化と現前化という二種類の対象関係があり、その異種の志向的对象関係によって、われわれの通常の対象把握は成り立っているということが第一点。そして、さらには、その場合、現前化というのは、フッサールでもそうであったが過去のものでも未来のものでも、あるいは想像上の対象に対しても生じうる関係であるということ。そして、アクチュアルな現在において何ものかを知覚する際にも、知覚とは違った種類の対象関係として、過去の事柄を想起し、そして現在の時点で対象把握されている知覚像に対して、別のイメージを呈示する現前化の働きが関与する。過去の想起が、知覚に対して先取的になされるのであるから、もうそれは予期ということになる。過去の意味での「先」と未来にかかわる「先」とを両方とも含む作用として考えられている。

基本的には、現在化といい、現前化といい、両方とも何らかの存在者に対する<かかわり>(Verhalten)なのであるから、フッサールでいえば、完全なる「志

²³ プラトンの表現で言えば、次のようになる: ἡ σύναψις αἰσθήσεως πρὸς διάνοιαν. 195 d

²⁴ Martin Heidegger, *Gesamtausgabe* Bd. 34, S.313.

向性」である。とくに現在化ということで、αἴσθησις が考えられているが、ここでは単なる sensation ではなく、perception であった。対象性、ないしは対象関係(基本概念 II)が成立しているとされた。また、先駆的想起としての現前化は、第一次的予期としての protention ではなく、しっかりとした対象関係であるから統握が働いており、expectation である。「思いなしの虚偽」というのは、従って、perception に expectation が介在し、実際とは違った認識像が成立してしまうのである。

プラトンは、「虚偽の思いなし」ということが、例えばテアイテトスをソクラテスに「取り違えて」思い違いをしてしまうような ἀλλοδοξία(mistaking one thing for another)ということではないという。それはいわば、知覚内部での錯誤ということになるのであり、プラトンはそのような事態を考えていない。というのも、その場合、当人には現に見ている人物が、ソクラテスであるとはまったく考えてもいないからである。ただ、テアイテトスのみが対象となっている。だから、認識者本人にとってみれば、AさんをBさんと取り違えて見てしまっているということ自体、知り得ないのである。Bさんを見ているとしか考えられない。ということは、「虚偽の思いなし」ということは「AさんをBさんと取り違えて、思い違いをしてしまう」ということ自体、不可能であるという。

しかし、そうであろうか。

まずハイデガーの解釈による〈プラトン〉の虚偽論では、まず Gegenwärtigung と Vergegenwärtigung の区別を利用する。この区別は、そのようなかかわりの対象が現に anwesen しているか否かで区別しているのである。心理作用の特徴を示して区別するのではなく、そのかかわりの対象が leibhaftig に anwesen してる場合には、Gegenwärtigen であり、対象が anwesen してはいない場合は、Vergegenwärtigung である。対象は存在しているか、いないかのどちらしかない。例えば、知覚が Gegenwärtigen だとして、対象が現前してれば、見間違はずはない。

しかし、よく考えてみよう。

ハイデガーはここでは、〈知覚のレベル〉では、見間違という可能性を排除している。ハイデガー自身、知覚していても「さしあたっては leibhaft に与えられていない」場合があることをみとめている。つまり、知覚における明証性の違いを語っているのである。「与えられる」というのは、意識の様態を記述するタームである。

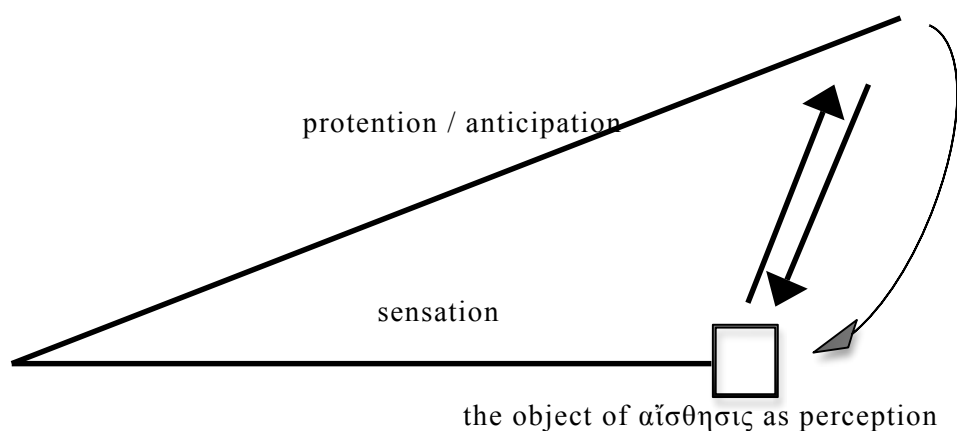
それに対して、かかわり(Verhalten)に関しては、かかわるか否かしかない。leibhaftig にかかわるといふ表現も不可能だろう。知覚には明証性の度合いがある。極く明証性の低い場合には、AさんをBさんに取り違い、その明証性がだんだんと高まるにつれて、鮮明な知覚像が結ばれ、Bさんではなく、Aさんであることがわかることがある。そのような場合、後になって、「私はAさんをBさんであると取り違えた」と言えるのであり、取り違えていたそのときには、「私はAさんをBさんであると取り違えています」とは言わない。

われわれには、まだ〈AさんをBさんであると取り違える可能性〉を検討する必要がある。知覚の様態の解明である。

フッサールの概念装置では次のようになるだろう。

例えば、phi-lo-so-phy という単語は、-lo-の発音が聞こえた段階で phi-は過去把持によって意識にとどめ置かれているが、同時にその時点ですでにリアルタイムで意味付与がなされ、＜philosophy＞ではないかという予料(Antizipation)がなされる。そして、次の時点での音声的刺激への未来把持が生ずるはずである。つまり、-so-への予料である。その場合は、予測が破られ、変更がなされ、修正される。

これは、Gegenwärtigung のみの出来事である。そこでハイデガーが Gegenwärtigung と Vergegenwärtigung に関して描いた Gabel の図を知覚内部の構造に移すことができるだろうか。



<知覚内部の構造>

基本概念 IX、つまり感覚的内容とその内容への意味を与える「統握作用」との関係を上記の図は表し、しかもその意味は過去の記憶に源泉があり、その程度の知覚においてさえ、未来把持的作用によって先行的に予料され感覚へと投げ返されるという構造を意味している。

3. 結語にかえて—<対象>の自己呈示と「立ち現れ」—

さて、最後に、ハイデガーが 1940 年代に行った『ヘラクレイトス』講義に注目し、ζωή 概念について一言、言及したい。

ハイデガーによれば、古代ギリシア人たちにとっては、ζῶα とは、「立ち現れるものであり、その立ち現れにおいて臨在しているもの」(die Aufgehenden und im Aufgang Anwesenden)という意味をもち、「閃き入るものであり、現出するもの」(die Hereinblickenden und Erscheinenden)にもふさわしい名称であるという²⁵。それは端的には「立ち現れること」としての φύσις と根源的な繋がりがある。だがそのような「時間的プロセスとしての現出」ということは、単に「生きるもの」、現代的には生物学的生命を意味するのではなく、いわばある<時間的な、あるいはダイナミックな形式的構造>を言っている。

²⁵ Martin Heidegger, Gesamtausgabe, Bd.55, S.95.

しかし、単に形式的と言うことばかりではない。ある種のエネルギーの発現を実感させる経験に対応しているように思われる。

フッサールがその時間論において探り当てた絶対的な時間構成意識とは、本質的には、目の前の生々流転するヘラクレイトスの流れに対峙し、その生成に立ち会っているわれわれ自らの生の、つまり ζῆν(生きること)を指しているように思われる。ハイデガーが「対象の対象性」の根底に垣間見た φύσις と ζωή とは、われわれの日常の生活世界の具体相の根底にあり、端的にまさにそこに出現しつつある生命的現実を指しているのではなかろうか。そして、そのような現実とは、われわれにとってやはり確実なクオリアを伴い、感性の次元で立ち現れてくるものである。

フッサールにおいても、ハイデガーにおいても、根本的洞察は同じである。生は自ら生起する時間そのものである。〈対象〉存在は、自然としての立ち現れであり、そして同時にわれわれ自身の存在も、生としての立ち現れである。両者の立ち現れの呼応こそがこの世界の現出ということなのだろう。

シェラーは、そのような呼応関係を〈問いかけに対する、対象自身の応答反作用〉と概念化し、対象の「自己呈示」、ないしは「自己開示」と呼ぶ。そして、世界全体としてみると、世界が自己開示する出来事として、書物による「啓示」に匹敵する「自然的啓示」(natürliche Offenbarung)であるという²⁶。

また、「生の哲学」を構築しようとしたディルタイは、下記のような「宇宙の一切の現象」の〈二側面〉を語っている。

宇宙の一切の現象(Erscheinungen)は二つの側面を持っている。一方の側面から見ると、すなわち外的知覚においては、宇宙のあらゆる現象が感性的対象として与えられており、しかもこのような感性的対象として物理的連結に内に存立している。これに対して、いわば内部から把握すると、これらの現象は自らの内に生連関を有しており、そうしてその生連関はわれわれ自身の内部において体験されうるものなのである²⁷。

このディルタイの言葉を持って本発表を終えることとする。

²⁶ Max Scheler, *Liebe und Erkenntnis*(1915), in: *Gesammelte Werke*, Bd. 6, Francke Verlag, Bern und München, 1963, S.97.

²⁷ Wilhelm Dilthey, *Die Typen der Weltanschauung und ihre Ausbildung in den metaphysischen Systemen* (1911), in: *Gesammelte Schriften*, Bd. VIII, S.117.